

十年後、二十年後の私は、どこで、どんなふうに生きているのだろうか。まだ答えは分からない。けれど、はっきりと胸を張って言えることが一つだけある。それは、私は必ず自分の力で誰かの役に立つ人間になるという決意だ。

人は一人では生きていけない。私はそのことを、これまでの人生で何度も実感してきた。友達が支えてくれたから挑戦できたことがある。先生の励ましがあったから最後まで走り抜けられたことがある。家族がそばにいてくれたから、安心して笑顔でいられた日々がある。振り返れば、私の歩みはいつも人とのつながりに守られてきた。だからこそ、次は私が誰かの支えになる番だと心から思う。

将来の私は、医療や福祉の現場で働いている姿を思い描いている。小さい頃に病院で出会った看護師さんたちの姿は、今でも忘れられない。患者さんに優しく声をかけ、痛みや不安を和らげるその表情は、まるで暗い部屋に柔らかな光を差し込むようだった。その光に励まされ、安心する人の姿を目にしたとき、私もこんなふうに人を支えられる大人になりたいと強く感じた。

しかし、憧れだけでは夢は叶わない。三十代、四十代になったとき、生き生きと胸を張って働いている自分であるためには、今をどう過ごすかがすべてだ。知識や技術を学ぶことは欠かせない。けれどそれ以上に大切なのは、人の心に寄り添う力だと私は思う。相手の言葉の奥にある感情を感じ取り、痛みや不安を理解する。その力がなければ、本当の意味で人を支えることはできない。

だから私は、日常の小さな場면을大事にしている。友達の悩みを聞くときは、最後まで遮らず耳を傾ける。家族にありがとうを伝えることを忘れない。そうした小さな積み重ねこそが、未来の私を形づくっていくのだと信じている。

また、私は自分らしさを失わずに歩んでいきたい。社会に出れば、結果や評価に追われ、時には自分を見失ってしまうこともあるだろう。けれど私は、自分が本当に大切にしたいものを見極め、誇りを持って進みたい。私にとってその拠りどころは、言葉を紡ぐことや、人と語り合う時間だ。文章を書くことで心が整い、誰かに届いたときの喜びは、私にとってかけがえのない力になる。この好きを大切に続けることが、どんな未来でも自分を守る支えになると信じている。

十年後、二十年後の私は、どんな答えを持っているだろう。今の努力が実を結び、私は人とつながり続けてきたと胸を張って言える自分であるだろうか。そう思い描くだけで、私は今日を大切にしたいと思える。未来は遠いようでいて、実は今日と地続きの場所にある。だからこそ、私は今という時間を全力で生きていく。

私の将来は、まだ真っ白なキャンバスのようなものだ。けれど、そのキャンバスには必ず、人を照らす光の色を描いていく。そして私は誓う。どんな道を歩もうとも、私は必ず人を支える存在になる。誰かの痛みに寄り添い、誰かの笑顔を守る。そのために、今日から努力を重ね、一歩ずつ未来へ進んでいく。これが、私の将来だ。